

主の降誕を待ち望む



『東方三博士の礼拝』（ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノ作／最終面に解説）

国際

- 教皇、シノドス実施過程で 謙虚な教会と真理の探求を 2面
- カトリック学校に進化を求める 教皇、教育に関する使徒的書簡 2・3面
- パレスチナ大統領と初の会談 教皇、ガザの平和で意見交換 3面
- 国際記事ダイジェスト 4面

国内

- 日韓司教交流会 5面
- 国内記事ダイジェスト 映画紹介 6面
- 「何を信じるか」を明確にしたニケア公会議から1700年 7面

- 主日の福音解説 8・9面
- 短歌・俳句・告知板・番組・きょうをささげる(12月の祈り) 10面
- 訃報 11面
- 【表紙絵解説】世界が最も暗い時 光の主 イエスが生まれた 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパンニュース



国際

教皇、シノドス実施過程で 謙虚な教会と真理の探求を

【バチカン10月26日CNS】カトリック教会の最高の規則は愛であり、全ての信者に対して、他者を裁かず、排除せず、支配せずに、奉仕することを求める、と教皇レオ14世は強調する。

「誰も自分の考えを押し付けてはなりません。全ての人は互いに耳を傾け合わなければなりません。誰も、のけ者にされてはなりません。私たち全員が参加するように招かれています」と教皇レオは10月26日、バチカンの聖ペトロ大聖堂でささげたミサの説教で会衆に語りかけた。

「誰も真理全体を熟知してはいません。私たち全員で謙虚に、共に真理を探求しなければなりません」と教皇は付け加えた。

ミサは10月24日から26日まで開かれた聖年の「シノドス・チームと参与機関のための祝祭」を締めくくった。祝祭に参加した約2000人は、教区レベル、地方教会レベル、大陸レベルの教区代表者会議や司祭評議会、教区・小教区司牧評議会、教区・小教区経済問題評議会などのメンバーとして参加登録されていた。

祝祭では研究集会などの集まりがあり、2021年から24年までのシノダリティー（共に歩む旅）についてのシノドス（世界代表司教会議）の『最終文書』が促す実施ステージの強化を目指した。

「私たちは謙虚な教会を夢見、また築かなければなりません」と教皇レオ14世は説教で呼びかける。

「勝ち誇って、自信満々な心で真すぐに立つ教会ではなく、むしろ、身を低くして人の足を洗う教会とならなければなりません」

「人を裁く教会ではなく、むしろ、全ての人、一人一人の人をもてなす場とならなければなりません」と教皇は続ける。「自分のうちに閉じこもる教会ではなく、神に耳を傾け、全ての人にも同じよう

に耳を傾ける教会とならなければなりません」

緊張を解決し、霊的生活を重んじる

「それは、キリストの思いを身にまとうためです。教会の空間を広げ、それが団体的で互いに受け入れ合うものとなるように、互いに助け合ってください」と教皇は促す。「このことは、信頼と新たな精神をもって、教会生活全体に存在する緊張を乗り切る助けとなります」

「一致と多様性、伝統と革新、権威と参加の間の緊張を、聖霊によって作り変えていただくのです」

「それは、あるものを別のものにすることによって緊張を解決することではなく、聖霊によってそれを実り豊かなものとしていただくことです。そうすれば、緊張は調和され、共同の識別に向けて方向づけられます」と教皇は説明する。

「シノドス的な教会であるとは、真理は所有されるものではなく、ともに探求されるものであることを認め、愛である方を愛する、落ち着くことのない心に導かれることです」

シノドス・チームと参与機関は、「教会の中で起きていることを表します。教会においては、人間関係は、権力の論理に答えるのではなく、愛の論理に答えます」。

教皇レオ14世は強調する。キリスト教共同体は、「この世の」論理に従うのではなく、「霊的な生活を第一に重視します。霊的生活は、私たちが皆、神の子であり、互いに兄弟姉妹であり、互いに仕え合うように招かれていることを、私たちに見いださせてくれます」。



動画



10月26日、教皇レオ14世はバチカンの聖ペトロ大聖堂で、聖年の「シノドス・チームと参与機関」の祝祭の閉会ミサを司式した(CNS)

カトリック学校に進化を求める 教皇、教育に関する使徒的書簡

【バチカン10月28日CNS】過去数世紀で変化を遂げてきたカトリック学校は、さらに進化を続けて、科学技術だけでなく人生の意味と目的についての混乱という難題にも直面する若者たちを助けていかなければならない、と教皇レオ14世は呼びかける。

「私は全ての教育機関に向けて呼びかけます。これからの若い世代の心に語りかける新しい時代を開いてください。知識と意味、能力と責任、信仰といのちを改めて一つに結び付けるのです」と教皇は、自身の新しい使徒的書簡で促している。

第2バチカン公会議文書『キリスト教的教育に関する宣言』の発表60年を記念する使徒的書簡「新しい希望の地図を描く」は10月28日、イタリア語版だけで公表された。

教皇レオ14世は同使徒的書簡の中で、正式に聖ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿を「聖トマス・アクィナスと並ぶ教会の教育の使命の共同の保護者と宣言」した。

教皇は11月1日、聖年の「教育界の祝祭」の中で、公式に聖ニューマンに「教会博士」の称号を授与する。同聖人の「神学の刷新とキリスト教教理の発展についての

理解」に貢献したことが認められる。聖ニューマンは1801年2月21日、英国ロンドンに生まれ、英国国教会(聖公会)の司祭に叙階されていたが、45年にカトリック教会に転籍、79年に教皇レオ13世によって枢機卿に叙任され、90年に死去した。

アルゴリズムより人間を大切に

教皇レオ14世は使徒的書簡で指摘する。デジタル革命や人工知能(AI)の到来に直面していても、カトリック学校や大学は「驚くべき耐久力」を示している。

「教育界がキリストのことばに導かれていけば、後退することはない、再び前進していきます。壁を築くのではなく、橋を架けます。創造性をもって反応し、知識と意味の伝達への新しい可能性を開きます」と教皇は強調する。

国際

教皇レオはカトリック教育者や教育機関に向けて、「三つの優先事項」に力を注ぐよう求めている。

「一つ目は内面の生活に関わることです。若者たちは深いものを求めます。そのために必要なのは、静かな場と識別、自分たちの良心、そして神との対話です」

「二つ目は人間らしいデジタル文化についてです。私たちは科学技術とAIの賢明な活用を教育しなければいけません。アルゴリズム(課題を解決するための処理方法)よりも人を大切にして、技術的、情緒的、社会的、霊的、そして環境的な形の知性を調和させるのです」

「三つ目は武装せず武装を解く平和に関わります。非暴力的な言葉、和解、壁を築くのではなく橋を架けることを教えていきましょう。『平和を実現する人は、幸いである』(マタイ5・9)が、学びの方法と内容になりますように」

「心が心に語りかけるのです」

教皇はそれと同時に、こう指摘する。カ

トリック学校が科学技術を無視したり、避けたりすることはできないが、デジタルプラットフォームやデータ保護、全ての学生生徒のための公正なアクセスについて識別しなければならない。

「どんな場合にも、アルゴリズムが教育を真に人間らしくするものにとって代わ

ることがあってはいけません。それは、詩や風刺、愛や芸術、想像力、発見の喜び、そして成長の機会としての過ちからの学習にまで及びます」と教皇の使徒的書簡は説明する。

教皇レオ14世は強調する。「教育を受けることが特権になってしまっているところでは、教会は門戸を大きく開け放って、新しい方法を考え出さなくてはなりません」



10月27日、聖ペトロ大聖堂での教皇庁立大学の学生とのミサ前に、使徒的書簡「新しい希望の地図を描く」に署名した教皇。教皇庁文化教育省長官のジョゼ・トレンティノ・デ・メンドンサ枢機卿が見守った(CNS)

ん。『貧しい人を失うこと』は、学校そのものの意味を失うことだからです」

「教育は希望の行いです」

「カトリック学校と大学は、質問が黙殺され、疑いが禁じられるのではなく、寄り添われる場でなくてはなりません」と教皇は続ける。「心が心に語りかけるのです」と、教皇は聖ニューマンの枢機卿としてのモットーを引用した。

パレスチナ大統領と初の会談 教皇、ガザの平和で意見交換

【バチカン11月6日CNS】教皇レオ14世は11月6日、バチカンにパレスチナのマフムード・アッバス大統領を迎えて初会談した。バチカンとパレスチナの包括的合意で、パレスチナ国家の承認とパレスチナでのカトリック教会の活動の自由が保証されてから10年を記念した。

「友好的な会談の中で、ガザの民間人に対する支援供給と『2国家解決』による紛争終結の緊急な必要性が確認された」と、30分間の会談後にバチカンが発表した声明は明らかにしている。

教皇レオとアッバス大統領が対面で会談したのは初めてだが、両者はガザでの激しい戦闘が続く、人道危機がますます深刻化していた7月に電話で会話をしていた。

パレスチナはガザの領有権を主張していて、2007年にイスラム組織ハマスが実効支配するまで統治していた。05年からパレスチナの大統領を務めるアッバス氏は、ハマスと係争中の主流派政党ファタハに属している。

教皇レオ14世は11月4日、記者団に、イスラエルとハマスの停戦合意の第1段階

が続いていることに感謝しているが、状況は「非常に不安定」だと語った。

教皇はさらに、イスラエル人がパレスチナのヨルダン川西岸で入植地を拡大していることや、エルサレムのイスラムの三つ目の聖地であるアルアクサ・モスク(礼拝所)前での挑発行動が続いていることについても質問された。アルアクサ・モスクは、

ムスリム(イスラム教徒)が「ハラム・アッシャリーフ」と呼び、ユダヤ教徒は「神殿の丘」と呼ぶ場所にある。聖書によれば、ここに二度、ユダヤ教神殿が建っていたとされる。

「ヨルダン川西岸と入植者たちの問題は、本当に複雑です」と教皇は記者団に答えた。「イスラエルは一つのことを言っても、時にそれと別のことをします。私たちは全ての人にとっての正義のために共に力を尽くしていきたいのです」

「包括的合意」に感謝を表す

アッバス大統領は11月5日、ローマに到着するとすぐに聖マリア大聖堂を訪れ、教皇フランシスコの墓前に白いバラの花束を手向けた。

「私は教皇フランシスコに会いに来たのです。教皇がパレスチナとパレスチナの国民にしてくださったことを忘れられないからです」と同大統領は記者団に語った。「そして私は、教皇が誰からも求められることなしに、パレスチナ国家を承認されたことも忘れることができません」

2015年に調印された「聖座(バチカン)とパレスチナ国家の間の包括的合意」で、バチカンはパレスチナを正式に国家として承認し、長年の「2国家解決」支持を改めて確認した。聖地の緊張解決のためには、イスラエルとパレスチナの双方が主権と安全保障、画定された国境を享受するのが唯一の方法だとしている。



11月6日、教皇レオ14世とパレスチナのマフムード・アッバス大統領は、バチカン使徒宮殿の教皇図書室で会談した(CNS)

国際

信教の自由への攻撃が急増 教皇庁国務省長官の枢機卿

【ローマ10月21日CNS】信教の自由は世界196カ国のうち62カ国で厳しく制限され、およそ54億人が影響を受けている。「世界人口のほぼ3分の2が、深刻な信教の自由の侵害が起こっている国々で暮らしている」と教皇庁国務省長官のピエトロ・パロリン枢機卿が指摘した。



記事全文

教皇の一般謁見講話 悲しみを癒やす復活の喜び

【バチカン10月22日CNS】キリストの復活の喜びには、今日の世界に広がる悲しみと不安を癒やす力がある、と教皇レオ14世は強調する。「心の旅路の途上で、復活された方は私たちと共に、私たちのために歩んでくださいます」と教皇は10月22日、一般謁見で語った。



記事全文



動画

教皇と英国王、歴史的な合同礼拝 バチカンで16世紀宗教改革以来

【バチカン10月23日CNS】教皇レオ14世は10月23日、バチカンに英国王チャールズ3世とカミラ王妃を迎え、華々しく儀礼を尽くすとともに、システィーナ礼拝堂での歴史的な合同礼拝に臨んだ。



記事全文



動画

諸宗教対話は教会の「生きる道」 教皇、公会議文書発表60周年で

【バチカン10月28日CNS】カトリック教会にとって、諸宗教対話は「ある種の駆け引き、または手段ではなく、生き方であり、耳を傾ける人も話す人も、携わる全ての人をつくり変える心の旅路なのです」と教皇レオ14世は説いている。



記事全文

政治指導者にある戦争終結の務め 教皇、諸宗教世界平和祈祷集会で

【ローマ10月28日CNS】世界は平和と、権力の乱用や法の支配の無視が終わることを渴き願っている、と教皇レオは世界の諸宗教指導者との平和の祈りの集いで強調した。教皇は、「戦争はたくさんです。死と破壊と追放によって苦しみが募るだけなのです」と訴えた。



記事全文



動画

聖ニューマンを「教会博士」に 教皇、聖年の「教育界の祝祭」

【バチカン11月1日CNS】教皇は11月1日、諸聖人の祭日に、聖年の「教育界の祝祭」を締めくくるミサを司式し、聖ニューマン枢機卿を教会史上38人目の「教会博士」としたことを宣言した。聖ニューマンは神学や霊性で決定的な貢献をした東西の男女聖人たちに加わった。



記事全文



動画

死者のための祈りは再会の希望 教皇、ローマの墓地でミサ司式

【ローマ11月2日CNS】キリスト者は「死者の日」に墓参りをして、愛する故人を追悼するときに、この世の生を終える時に再び主と共に再会できることを信じている、と教皇レオ14世は語った。



記事全文

教皇の一般謁見講話 主の現存は人生を変革する

【バチカン11月5日CNS】今も続く復活されたキリストの現存は人生を生きる意味で満ち、人間の永遠のいのちへの憧れが正当なだけでなく、手に届くものであることを証している、と教皇レオ14世は強調する。



記事全文



動画

真の信仰は「悪の鎖を断ち切る」 教皇、聖年の謁見で「労働者」に

【バチカン11月8日CNS】真の信仰から生まれる希望は「悪の鎖を断ち切り」、ゆるしと正しい行いを促す、と教皇レオ14世は11月8日、聖年の謁見で指摘した。



記事全文

教会を堅い基盤の上に保つ働きを 教皇、「ラテラノ教会の献堂」ミサ

【ローマ11月9日CNS】多くの意味で、カトリック教会は常に「建設現場」であり、神はそこで、土を深く掘り、懸命に粘り強く働かねばならない信者たちを養成している、と教皇レオ14世は説いている。



記事全文

医療におけるAIの活用で 教皇、細心の注意を求める

【バチカン11月10日CNS】人間の生命がより脆弱になっているときには、直接または科学技術を使うかのどちらの場合でも、そのケアに当たる人の責任はより大きくなる、と教皇レオ14世は強調する。医療において人工知能(AI)を活用する場合に、「私たちが確認しなければならないのは、それが人間関係と施されるケアの双方を真に強化するものであることです」と教皇は説明する。



記事全文

トランプ政権の移住者政策に異議 米国司教協「特別司牧メッセージ」

【ボルティモア(米東部メリーランド州)11月12日OSV】米国カトリック司教協議会は11月12日、東部ボルティモアで開催中の秋季司教総会で、「わが国での移住者についての私たちの懸念」を表明する「移住についての特別司牧メッセージ」を採択した。

この声明文の発表は、米国司教団の中でトランプ政権による移住者政策の幾つかに教会にとってのリスクを認める司教の人数が増えていることを示している。



記事全文

人生を観想して理解する助けに 教皇、映画監督や俳優らと会見

【バチカン11月15日CNS】教皇レオ14世は11月15日、世界的に有名な映画監督や俳優たちと会見し、映画には人々が「人生を観想して理解する」助けとなり、「その素晴らしさともろさを物語として、無限への憧れについての解釈を示す」力があると語った。



記事全文



動画

神に愛されていることを伝える 教皇、聖年の「貧しい人の祝祭」

【バチカン11月16日CNS】教皇レオ14世は11月16日、聖年の「貧しい人の祝祭」に当たって昼食会を開く前に、ミサをささげ、全てのキリスト者が「温かく人を迎え入れ、ゆるして、傷の手当てをし、慰めて、癒やす神の愛」を分かち合うようにと祈った。



記事全文



動画

誰もが聖書を手に取るように 教皇、カトリック聖書連盟に

【バチカン11月17日CNS】若者たちがとても多くの時間を「デジタル環境」で過ごしている今、カトリック聖書連盟のメンバーたちは全ての人を聖書に導くという第2バチカン公会議による求めに従っているか自問する必要がある、と教皇は指摘した。



記事全文

「被造物は叫びを上げている」 教皇、COP30にビデオで

【バチカン11月18日CNS】「被造物が叫びを上げて」、数億もの人々が気候変動と環境汚染に苦しんでいるにもかかわらず、政治家たちは行動ができていない、と教皇は訴えている。ブラジル北部ベレンで開かれている国連気候変動枠組み条約第30回締約国会議(COP30)が11月17日、最終週に入中、教皇はキリスト教の代表や活動家たちにビデオメッセージを送った。



記事全文

教皇の一般謁見講話 被造物を守らなければ破壊者

【バチカン11月19日CNS】人々が自分たちを「被造物の園の守り手」だと考えないなら、「私たち人類は、その破壊者となってしまいます」と教皇レオ14世は警鐘を鳴らす。



記事全文



動画

国内

日韓司教交流会 広島教区で開催 戦後80年「傷跡と希望」を共有

新たな支援も

韓国と日本の司教は11月18日から20日まで広島教区（白浜満司教）に集い、「戦後80年の傷跡と希望 ～若い世代に平和をつなぐために」をテーマに学び合い、親交を深めた。

27回目となる今回の日韓司教交流会には、韓国から17司教、日本から16司教が参加した。

広島教区内の朝鮮学校や広島平和記念資料館について学び、2027年のワールドユースデー（WYD／世界青年の日）ソウル大会の準備の進捗状況について共有した。

韓国司教団は最終日、山口県宇部市の長生炭鉱の水没事故（1942年）で犠牲になった朝鮮半島出身者と日本人の遺骨収集を支援すると発表した。

朝鮮学校の人々の「痛み」

初日はイエズス会の中井淳神父が講師を務め、「日韓カトリック教会の架け橋としての朝鮮学校、在日の人々の痛みによりそうことで見えてくること」について発表した。

朝鮮学校はアジア太平洋戦争（1937～45年）後、日本にとどまった在日朝鮮

人が建てた。朝鮮半島から日本に連れてこられた人のうち9割以上は南側（現韓国）の出身者であり、朝鮮学校で学んでいたのも多くが南側の子どもだった。

だが後に成立した韓国政府が朝鮮学校を支援しなかったため、朝鮮半島南部の出身者は「捨てられた」という意識を強めた。しかも多くの自治体は、朝鮮学校への補助金を停止した。国が2010年開始の高校無償化制度から朝鮮学校を対象外としたことによって、朝鮮学校の財政が圧迫されたと指摘されているという。

そうした中で、朝鮮学校を支えてきたのが北朝鮮だ。朝鮮学校の人々にとって「故郷は韓国、祖国は人民共和国」であり、「南北統一を誰よりも望んでいるのが朝鮮学校の人々」だという。

毎月、山口県庁に出向き、政府が朝鮮学校への補助金を打ち切ったことは教育権の侵害だと抗議してきた中井神父は、前回の



日韓司教交流会の研修会場

交渉の場でのやりとりも紹介した。抗議に対し、県庁職員が「（朝鮮学校から）日本の学校に移ればいいではないですか」と言うと、朝鮮学校の校長は、こう答えたという。「その言葉が80年間、ずっと私たちの心を傷つけてきたことを分かってくれないのですか」

長年の差別や偏見、教育や存在の否定に対する悲しみ、そして歴史の重みを理解してほしいという願いが込められた言葉だった。

中井神父は朝鮮半島出身の人たちが抱える困難に寄り添ってきた経験から、「日韓の教会が信頼のネットワークでつながることによって、助けられる命がある」と語った。

海へと向かうための希望

交流会2日目は、広島平和教育研究所のイ・スンフンさんが「外国人が見る平和記念資料館」と題して講演し、戦争の実情や展示の在り方を考えるきっかけを提供した。

司教たちは、広島平和記念公園に近い観音町教会（広島市）を訪れ、韓国司教協議会会長のイ・ヨンフン司教（スウォン教区）主司式により韓国語でミサをささげた。

ミサに参加したソ・ジョンエさん（60／同教会）は、韓国から来日して20年。15年前に日本で受洗したが、日本語が不自由なため日本語の聖書を読むのが困難だったという。「多くの韓国人の司教様が



長生炭鉱の水没犠牲者が眠る海の前で、海中の坑道に続く二つの排気口（ピーヤ）に臨み、祈りをささげる司教たち。この後、1人ずつ海に献花した

いらして、日本の司教方と共にミサを司式する姿に深く感動」したと話した。

同教会の信徒（57）は「（韓国語は分からなくても）ミサの中に平和を感じて、涙が止まりませんでした」と語った。

一行は平和記念公園にある韓国人原爆犠牲者慰霊碑を訪れた。チョ・ファンキル大司教（テグ教区）と前田万葉枢機卿（大阪高松教区）が献花し、一同、祈りをささげた。

最終日20日は、2027年WYDの準備の進捗状況について、ソウル教区のイ・キュンサン補佐司教が発表した。

WYD参加希望者のビザ取得に関する課題や、外国籍の青年がどのように準備に関わっているかについて、質問があった。

韓国の司教団、遺骨収集の支援を決定

韓国司教協議会会長のイ司教は全体会で、韓国の司教団が長生炭鉱水没事故の犠牲者の遺骨収集を支援していくことを決めたと語り、日本の司教団にも協力を求めた。

日韓の司教団は、交流会前日の17日、オプションルツアーとして長生炭鉱を訪れた。現地では、市民グループ「長生炭鉱の『水非常、を歴史に刻む会』」共同代表の井上洋子さんから、遺骨収集やがれき撤去に必要な資金が不足しているものの、国の支援は得られていない現状について説明を受けていた。

交流会の最後に、白浜司教が主司式するミサが広島カテドラル世界平和記念聖堂で行われた。



記事全文



交流会の最後に、広島カテドラル世界平和記念聖堂で共にミサをささげた韓国と日本の司教たち

国内

「朝禱会」関東ブロック大会を開催 共に歩み続ける大切さ

超教派による朝の祈りと食事の会「朝禱会」^{ちやうとう}。その関東地域のメンバーが集う「朝禱会関東ブロック大会」(関東ブロック代表・野村晋一／東京・関口教会)が10月20日、東京・新宿区の目白聖公会で開催された。聖職者と信徒合わせて77人が祈りと交わりの時を持ち、キリストの愛によって、共に歩み続けていくことの大切さを再確認した。



記事全文



▲「朝禱会」^{ちやうとうかい}関東ブロック大会の昼食会。朝禱会の基本は、祈りと食事を共にすること。他ブロックの参加者とも交流を深めた

セバスチャン木村と204殉教者レリーフ 長崎にも設置

殉教者セバスチャン木村のレリーフが、日本カトリック神学院に続き長崎市の西坂公園敷地内にも設置され10月26日、長崎教区主催で除幕式が行われた。セバスチャン木村は1622年の元和の大殉教で、54人の信者らと共に西坂で殉教した日本人最初の司祭。



記事全文

アジア太平洋地域のカトリックスカウト 指導者と若者が研修

2年に1度の「国際カトリックスカウト協議会(本部・ローマ)アジア太平洋地域カンファレンス」が11月1日から4日まで、東京都内の複数の会場で開催された。九つの国・地域から約80人を迎えて共に研修し、神から祝福されている実感を改めて確認し合った。



記事全文



▲「国際カトリックスカウト協議会アジア太平洋地域カンファレンス」最後の夜の国際交流会(11月3日) © 高崎尚彦

「教会らしさ」そっと織り込む 第3回サビエルフェスタ開催・山口

山口教会(山口市)で11月3日、第3回「サビエルフェスタ」が開かれた。広島教区の青年たちを中心とした実行委員会が主催。輪島塗の漆器や修道院の菓子など教会内外から25ブースが出店し、1000人余りが来場。にぎわう1日をテゼの祈りで締めくくするなど「教会らしさ」をそっと織り込む形となった。



記事全文



▲スタッフの青年たち ©カトリック広島教区青年活動企画室

死刑に関する地域会合 東アジア大会 共に廃止へ 現状を共有

「死刑に関する地域会合 東アジア大会」が11月7日から9日まで東京・品川区で開かれ、参加者延べ520人が死刑廃止に向けて共に歩む決意を新たにした。東アジア各地の六つの国・地域から、市民運動家、政治家、弁護士、学識者、ジャーナリスト、元死刑囚ら死刑廃止を目指して活動する人々が参加。日本の状況を学び、各国・地域の現状を分かち合った。



記事全文

大阪高松教区シノドス研修会 理解深め、使徒職の活性化目指す

2021年に始まったシノドス(世界代表司教会議)の歩みは現在も続いており、28年10月にはバチカンで「教会総会」が開かれる。シノドスへの理解を深め、一人一人が小教区や共同体で使徒職を担うことを活性化するための研修会が11月8日、大阪市のサクラファミリア(カトリックセンター)で開かれた。



記事全文

生活困窮者支援フェスタ開催 「現場とつながる」体験を

「貧しい人のための世界祈願日」(今年は11月16日)に合わせ、炊き出しの調理などが体験できるイベント「生活困窮者支援フェスタ」が11月15日、東京・文京区の関口会館で開催され、約50人が参加した。東京教区の「カリタス東京」と、同教区内の団体・グループが共催した。



記事全文

人身売買を禁止するために 宗教者ら課題分かち合う

国内における強制労働や性的搾取などの「人身売買」の現状と課題を、宗教や政治、メディアなどさまざまな視点で分かち合い、人間の尊厳について考える円卓会議が11月19日、東京・千代田区の参議院会館で開かれた。世界宗教者平和会議日本委員会・人身売買禁止タスクフォースが主催し、オンラインを含め100人が参加。人身売買禁止に向けたアピールを採択した。



記事全文

映画

陽なたのファーマーズ
フクシマと希望

福島県二本松市でソーラーシェアリング(営農型太陽光発電)に取り組む若き農業者たちのドキュメンタリー。野生動物や害虫と戦い、工夫を重ねながら根気強く、そして「アトラクション」のように楽しんで農業に取り組む青年たちの四季が描かれている。監督を務めた小原浩靖氏は前作『原発をとめた裁判長 そして原発をとめる農家たち』(2022年公開)で関西電力大飯原発の運転停止命令を下した(14年)元裁判長の活動と原発事故後の福島でソーラーシェアリングに活路を見いだす農業者たちの奮闘を追った。全国で公開中。



©小原浩靖



記事全文

ボンヘッファー
ヒトラーを暗殺しようとした牧師

© 2024 Crow's Nest Productions Limited

ナチス政権下のドイツに生きたプロテスタント・ルター派の牧師であり、神学者のディートリヒ・ボンヘッファー(1906~45年)は、アドルフ・ヒトラーの暗殺計画に加担するが、計画が発覚し、39歳で絞首刑に処せられた。本作は、彼がナチス政権の暴虐にどう抵抗したか、また極限状態にあって、いかにしてキリストに従う道を選び、人々と共に生きたかを描く。強制収容所での聖餐式で、彼は不安におののく他の囚人たちに向けてキリストの聖体を掲げた。全国で公開中。



記事全文

「何を信じるか」を明確にした ニケア公会議から1700年

阿部 仲麻呂 神父

(日本カトリック神学院教授、サレジオ修道会)



2025年は、教会における信仰の源泉を見直すとともに現代化を目指した第2バチカン公会議の閉幕60周年を祝うときであり、325年のニケア公会議開催から数えて1700周年の記念のときでもあります。それ故、ニケア公会議を巡る背景・決議事項・展望を簡潔に紹介します。先人の志を引き継ぎ、温故知新の精神を大事にするためです。

1. ニケア公会議以前の背景 —— なぜ開催されたのでしょうか

ニケア公会議以前の教会共同体は混乱した状態でした。313年の皇帝コンスタンティヌスのミラノ勅令によって、ローマ帝国内でキリスト教迫害が終結しました。つまり、それまでは「皇帝崇拝を拒絶する無神論」と見なされていたキリスト教も、ローマの他宗教と同等の宗教として認定されました。こうして信仰を自由に保てる時代となりましたが、新たな問題が生じました。世俗化です。言わば「迫害に耐え抜き、純粋な信仰を保つ努力をする者」と「キリスト者の誠実な奉仕の働きを無料で利用することで帝国の発展を目指す皇帝親派の新興の政治勢力に肩入れする者」とが教会共同体内部で混ざりました。

その上、「人間の理解力を超えた秘義を尊重して生きる者（敬虔な者、畏敬の念によって信仰の次元を生きる者）」と「人間的な思考法によって何事も納得するまで知り尽くそうとする者（合理主義者）」とが思想上の綱引きを始めました。特に、イエス・キリストをどのように理解すべきかが問われました。神の御子イエスは神なのか人間なのか、御父と御子はどのように一致しているのか。その論争は熾烈を極め、教会共同体を激しく分裂させました。

アレクサンドリアの司祭のアリウスをはじめとする合理主義の立場の神学者は唯一の神を信じるイスラエルの民の信仰の伝統を引き継ぐ正統な共同体づくりを目指すために、御父だけを神として尊び、御子イエスの立場を格下げして「神に近い最高の被造物」として扱うことで、御父と御子とが同時に神として並び立つことの矛盾を解決しようと考えました。こうしてアリウスは御子を御父の下に配置しました（従属説）。

しかしアレクサンドリアのアレクサンドロス司教とその秘書の聖アタナシオをはじめとする正統教父たちは、敬虔な祈りに基づいてキリストの救いの働きに信頼することに重点を置き、人間の理性によっては究め尽くせない神の領域を尊重しました。人間の思考能力を生かして何でも理解し尽くせると豪語するばかりか、言語を用いて何でも断言できるという傲慢な態度に溺れた神学者とは異なる道を選んだ教会の指導者が正統教父と呼ばれました。彼らは謙虚に神に感謝しつつ賛美の祈りをささげて、他者に奉仕し、必要以上に理性や言語によって物事の深層を詮索しない生き方（救済的な姿勢）を選びました。洗礼式やミサ聖祭の儀式や祝福の祈り、十字を切る動作などにおいて、御父・御子・聖霊に信頼してあらゆる人の救いを願う礼拝実践に参与するキリスト者は愛の実践に向けて派遣されましたので、理論よりも具体的に生きることの方が重視されています（正統信仰）。

2. ニケア公会議の内容 —— 何が決定されたのでしょうか

ニケア公会議は325年に開催されました。全教会で用いる共通の「信条」が決議され（ニケア信条）、御父と御子とが「同一本質」（ホ

モウシオス）であることが確認されました。御父である神と御子イエス・キリストとが常に人間を救うために決して切り離し得ないほどに一致して、体当たりで働くことが明らかとなりました。御父の人類救済への意志は御子によってこそ完全に実現されることになるので、常に両者は一体化して相手を生かします。徹底的に相手の下にまでへりくだって、身を低くして、自分のいのちを余すところなくささげ尽くして他者を生かす愛を生き抜く御父と御子とは、ひとつながりの慈愛そのものとして決して分かれたることなく一致しています。この秘義は1世紀末に成立したヨハネ福音書で証しされましたが、325年のニケア公会議が開催されるに至って教会共同体の公的な立場として正式に認定されました。この公会議で「信条」が定められ、私たちが何を信じて生きるのかが明らかとなりました。「信条」とは、キリスト者が信すべきポイントを過不足なくまとめた祈りの言葉です。

なお、この「ニケア信条」が381年の第1コンスタンチノーブル公会議の際にナジアンズの聖グレゴリオ議長の下で再度改訂されてキリスト理解と聖霊理解とが洗練される文言として発展し、今日のミサの際の信仰宣言の祈り（「ニケア・コンスタンチノーブル信条」）として教派の相違を超えた共通の遺産として受け継がれています。つまり56年かけて三位一体の神に信頼する信仰告白の土台が整いました。その際、ナジアンズの聖グレゴリオや聖大バジリオやニュッサの聖グレゴリオの尽力によって、自分たちが信じている事柄を味わって感謝と賛美をささげる「祈り」としての神学が営まれました。こうした教父たちの信念は「神の慈愛深い栄光に信頼して隣人の救済を第一とする思惟方法」（しやうえい 頌栄的な救済主義）と呼べるでしょう。人間の思考能力の枠内で神を理解する姿勢を捨てて、決して自己満足せずに、むしろ三位一体の神への礼拝と愛の実践とを敬虔な姿勢で深めることで社会に救済をもたらすのが正統な信仰の型です。

3. ニケア公会議以後の展望 —— 私たちの生活とどのように関わるのでしょうか

「相手に対する熱烈な愛故に徹底的な無私の姿勢で自分のいのちそのものを贈る〈ケノーオー〉」。この〈ケノーオー〉（から 自分を空にする）という、神による愛の極意がフィリピ書やニケア公会議によって再確認されました。この極意を絶やさずに受け継ぐことが、ニケア公会議後の時代を生きる私たちの展望です。〈ケノーオー〉という秘義を伝授するには、いのちがけで目の前の大切な相手に生きる力を授ける必要があります。御父と御子と聖霊とが唯一の愛の働きとして自分を相手にささげ尽くすことは、筆者なりの造語では「三無一愛」です。自分を空にして（無にして）ささげ尽くすことで相手を生かす姿は、親の子育てとも共通します。今も毎週のミサで〈ケノーオー〉の原事実に信頼を寄せる告白を共同で表明する信仰宣言の祈りが続きます。相手を最優先して自分のいのちをささげ尽くして貧しくなることで、相手の貧しさを豊かで円満な状態へと転換させる積極的な支えの姿勢は、御父の思いを実現する御子イエス・キリストによる寛大で圧倒的な気前よさとして1世紀の信徒たちの自発的な「キリスト賛歌」を实らせ、使徒聖パウロにも影響を与えました（フィリピ2・6-11）。神のお取り計らいを完全に明確に体现して伝達したキリスト（救い主）としてのイエスの存在意義を今日も実感させるのがニケア公会議によって決議された「信条」という祈りの型です。この尊い祈りの型の秘義を2千年かけて伝授した生ける信仰共同体の努力を私たちも後進に託します。



バチカン図書館内にある、ニケア公会議を描いた壁画（CNS）

主日の福音解説

12月7日（待降節第2主日）

マタイ 3・1－12

宣教地召命促進の日

荒れ野で叫ぶ者の声

洗礼者ヨハネは「荒れ野で叫ぶ者の声」（マタイ3・3）として登場する。「悔い改めよ。天の国は近づいた」。これが彼のメッセージの主眼である。同じメッセージをイエスも宣教活動を始めの際に繰り返しているが、イエスが湖畔の町カファルナウムで第一声を発したのに対して（マタイ4・12－17参照）、ヨハネは荒れ野で叫ぶ。

一見すると、荒れ野で声を上げることは理屈に合わないことのようにも思われる。荒れ野は人の住み着かない場所だからである。それは命を受け付けられない場所であり、当然、生活空間にも適さない。そこへわざわざ出かけて行って言葉を発するよりも、人のいる町や村で語る方がはるかに理にかなっていると考えたくもなる。ヨハネは何故「荒れ野」で叫んだのか。ヨハネのこうした活動にはどんな意味があったのだろうか。

第一に考えられるのは、荒れ野へ赴くことによって生じる言葉の重みであろう。言葉は生き方と不可分の関係にある。そう考えると、ヨハネはあえて厳しい場所に身を置いて、そこから言葉を発信して生きる道を選んだと推察することもできる。その結果、ヨハネの元には「エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々が来た」（同3・5参照）のだから、荒れ野で発した言葉は多くの人に届いたのである。

第二は聖書の読み方に関する事柄で、こうした読み方が良いのか悪いのか私にも判別ができない。ただし、個人的には「荒れ野」を人間の心の状態として読んでみたい気持ちがある。つまり、「悔い改めよ」という洗礼者ヨハネの言葉がむなしくこだましているのは、2000年前の荒れ野ではなく、今の私の心の中なのかもしれないという一種の隠喩的方法を用いた読み方である。

「回心せよ」というヨハネの言葉は、私に向けて語られているのに、私がそれを受け止めず、受け止め手を欠いた言葉は荒れ野におけるのと同じように私の心の中でいたずらにさまよい続ける。今週の福音をこうした霊的意味に解釈して信仰生活の糧にしたいと思う。

第三は、上述した第二の考え方のもう一つの側面ということになる。すなわち、ヨハネの言葉は受け止め手を持たない私の心という荒れ野においても、絶えず繰り返し語られ続け、それがやむことはないであろうという一種の希望につながる解釈である。わざわざ荒れ野を選んでそこに住むことを決意したのだから、隠喩的解釈をさらに拡大するならば、私の元を簡単に離れることはないということにもなる。

ただ、仮にそうした解釈を貫くのであれば、それを言い訳にせず、併せてそのことを神の忍耐として受け止め、回心を急ぐべきである。人の住まない荒れ野を人の住む場所に、人の子イエスの住む場所に急いで整えるべきである。

（熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会）



12月14日（待降節第3主日）

マタイ 11・2－11

救い主についての確信

今日の福音は洗礼者ヨハネについて述べています。わたしたちは既に洗礼者ヨハネが主の道を整えるために遣わされた人物であることを知っています。洗礼者ヨハネ本人も自らそのような使命を受けていることを人々に伝えました。

そう考えると、ヨハネは主について、つまりその方がどなたなのかについてははっきり分かっているはずなのに、今日の福音を見ると、そうでもないようです。

今日の福音でヨハネは、自分の弟子たちを送ってイエス様に尋ねさせますが、その時ヨハネ自身は牢の中にいました。

ヨハネが牢の中で死を迎えたことはよく知られています。つまり、それがヨハネの生涯の最期だという意味です。

時間的にヨハネがイエス様について証言し、イエス様に洗礼を授けた後になると思われますが、その時点でヨハネはこうに尋ねているのです。

「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」。

この質問を見ると、ヨハネもイエス様がメシアかどうかについてよく分からなかったか、あるいは確信できなかったということでしょう。

しかし、イエス様ははっきりと答えてはくさいませんでした。むしろ、見たことをヨハネに伝えるよう彼の弟子たちに命じられます。それは、目の見えない人が見え、足の不自由な人が歩き、死者が生き返る姿でした。

それがイエス様とヨハネだけが知っている暗号か、しるしかと思うかもしれませんが、実に、その全ては預言者イザヤがあらかじめ預言した内容で、それが今、実現されているという意味です。

メシアが来るとき実現されるという預言が全て、今、実際に起こっているのです。弟子たちが見て伝えた話を聞いて初めて洗礼者ヨハネは確信することができました。

わたしたちは神が示してくださる前に、その計らいや摂理について知ることができません。

そのため、神はよく理解できないわたしたちのために、先に示してくださいます。

そしてこう言われます。「わたしにつまずかない人は幸いである」。

主が来られるのを待ち望むこの時、神が今、何を行っておられるのか注意して見聞きする必要があります。そうすれば、わたしたちも洗礼者ヨハネのように、救い主が来られたことを確信することができるでしょう。

（ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会）



主日の福音解説

12月21日（待降節第4主日）

マタイ 1・18－24

神様から見て^{ただ}義しい方 ヨセフ様

^{ただ}義しい人とは神様に仕えている人という意味があるそうです。また、神様に仕える人はやさしい人のことです。ヨセフ様はやさしい方でした。

ヨセフ様はマリア様のことを、しかもおなかに赤ちゃんがおられる人を罪人としてさらし者にするようなことを決して望まれませんでした。

「マリア様とおなかの赤ちゃんをなんとか助けよう。みんなに分からないように自分から結婚の約束を取りやめよう」とヨセフ様は一生懸命考え、悩み疲れて眠り込んでしまわれたようです。

その夢の中に、主の使いが現れ、こう告げます。
「ダビデの子ヨセフ、心配しなくていいよ、大丈夫です。あなたの妻マリアをあなたの隣に受け入れなさい。マリアから生まれる子は聖なる息吹による子ですから」と。

主の使いはさらに「マリアは男の子を産む。その子にヨセフ、あなたがイエスと名付けなさい。なぜなら、その子はその子の民を背きから救うからですよ」と伝えます。

主の使いは最初からずっと、ヨセフ様に、あなたの妻はマリア様ですよと呼びかけ続けます。

「世界中のみなさん、見てください。おとめが身ごもって、男の子を生む。そして彼の名をインマヌエルと人々は呼ぶ」
その名は「神様はわたしたちの真ん中に一緒に」という意味です。

ヨセフ様にとって神様に仕えるということは、マリア様とイエス様にやさしく、あたたかく人生を共にすることでした。

フランシスコ教皇様もインマヌエルの名についてわたしたちに教えてくださっています。

「神がわたしたちの人生にともにおられ、わたしたちのただ中で生きておられるということなのです」（回勅『主はわたしたちを愛された』34）



ヨセフ様は眠りから起き上がり、主の使いが言い付けたように、ご自身の妻としてマリア様を隣に受け入れられました。マリア様の隣にはいつもやさしいヨセフ様がおられます。ヨセフ様とマリア様の真ん中にはイエス様がおられます。

「イエスがあなたに近づき、あなたの隣に座ることを受け入れてください」（同回勅37）

わたしたちの隣には、いつもやさしい聖家族がおられます。
（寺浜亮司神父／福岡教区）

12月28日（聖家族）

マタイ 2・13－15、19－23

幼子の命を守るために

幼子イエスの命が危機にさらされていることを知らされたヨセフとマリアはエジプトに避難し、やがて戻って来ることができた3人はガリラヤのナザレという町に住むようになった、というのが本日のマタイ福音書の内容です。

ところで、幼子の命を守るためにエジプトへの避難と帰還を主導したのは神です。神からの指示がヨセフに与えられますが、それは全て夢によるものでした。聖書における夢の多くは人間に対する神の意志を示す手段として描かれています。



エジプトへの避難と帰還という出来事においてヨセフは重要な役割を担っています。ところが、不思議なことに、4福音書のどこをさがしても彼の言葉は一言もありません。だからでしょうか、ヨセフは目立たない、控え目な存在のように思われているところがあります。

しかし、今日の福音の箇所を読む限りそうではないことがよく分かります。イエスの命が狙われていることを知るやいなや、ヨセフは素早く決断し、幼子と妻を連れ、夜の闇に紛れて出発しています。神の呼びかけに従おうとする従順さと、父親としての力強い姿がそこにあります。

避難と帰還という二つの話の末尾には、いずれも旧約聖書からの引用があり、さらには「預言者（たち）を通して言われていたことが実現するためであった」と共通して述べられています。エジプトへの避難と帰還という出来事は旧約聖書の預言が確かに実現したことを強調しています。

これは3人の旅が単なる逃避行などではなく、神による救いの計画が完成に向かって進んでいることを表しているのだそうです。

異国の地で難民となったイエスとマリアとヨセフの家族はどれくらいの期間そこにとどまったのか、また、どのような生活であったのかということについては聖書に何も書かれていません。

しかし、多くの苦難を強いられたことは間違いないでしょう。イエスの誕生の時に訪れた学者たちが贈り物としてささげた品（黄金、乳香、^{もつやく}没薬）を売って苦境をしのいだという逸話もあります。

ヨセフとマリアは命懸けで幼子イエスを守りながら時が来るのを忍耐強く待ち続けたことでしょう。そのことを通して家族の絆は深められていったに違いありません。

（立花昌和神父／東京教区 カットは全て高崎紀子）

文化

神さまは福音伝える術として私の声と手を使われる
天窓のプリズム映す聖堂にオルガニストの指の運びよ
庭先に脇差しのごと立ち咲きぬ老い母守るカクトラノオよ
聴き終へて帰るトラムの席にさへダナイローヴァの弓の音すも
バトルを一本買った嬉しさに想像している巴里の街角
詩編読む集い厳し今回もレクチオ・デヴィナ極めるところ
浦上に贈られて来し小鐘の写真に響くいつくしみの音よ
鬼灯を口を含みて鳴らした日赤い実破れべそをかいた日
人間と猫の共存父はいつも干物を焼きてほぐして与ふ

長崎 豊橋 赤澤 進
はつとりりのりこ
東京 向井美和子
東京 植竹 雄太
岡山 宮崎 清子
横浜 永井 榮司
秦野 遠藤 伸枝
福岡 三谷 淑美
長崎 荒井 慎一

それぞれの家にそれぞれの理由ありて口籠りたる人口調査

宮津 杉本 友子

【評】国勢調査がありました。家族構成や持ち家か、仕事に従事しているかなど答えにためらうこともあり、心情を「口籠り」がよく伝えていきます。「人口調査」を用いて、ルカ伝や民数記へ思いを誘います。

短歌

春日づみ

毎月5日まで(必着)、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は、本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。

空の旅青一色に秋の富士
【評】眼下に見る富士の青さが秋を醸している
◎高速路濃霧に赤き尾燈追ふ
町田 鈴木 咲子
【評】濃霧の時の運転の恐怖が伝わってくる
大 阪 酒井 湧水
金風や嬰兒に笑みの新教皇
名古屋 成田 友子
ロザリオで祈る手と手は秋の色
佐世保 川口 栄子
秋草に白き姿のマリア像
神戸 内田 泰代
露草や心に触れて咲きし藍
神戸 涌羅 由美
露の世の被爆ピアノに残る傷
神戸 木下 明
こほろぎや父の遠忌の台所
仙台 山口 岳人
椿の実殉教の碑に幼名も
東京 山本 真理子
手拍子に孫が歩みし花野かな
秋田 畑山 真子
うたた寝の夢を辿れる夜長かな
福岡 木本 敬子
秋雨に滲む街燈瞬けり
各務原 安江 郁子
鶏頭の燃ゆる角地や屋敷町
芦屋 平田 ひろみ
虫の声そこの間の動き出す
大牟田 岩永 美智子
秋の園歩幅と速さおのづから
東京 脇谷 善之
預言者の残せし葡萄房たわわ
川崎 守田 光代
埋められぬパズルの空欄夜のちろろ
立川 中村 克久
綿虫の群れて蒼天歪めたる
選者 吟

俳句

稲畑廣太郎選

毎月5日まで(必着)、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。

告知板

■全 国
▶こころといのちの法律相談(無料電話相談) 12月10日(水)、25日(木)午後3時～7時。くらし・職場・借金・家庭などのさまざまな悩みを抱える市民のための無料電話相談(未成年者可)。弁護士、精神保健福祉士が相談に応じる。相談電話番号は03-6257-1007(全国からの電話受付/通話料有料)または0120-556-289(東京・千葉・神奈川・埼玉・茨城・栃木・群馬発信限定/フリーダイヤル)。いずれも上記相談日限りの電話番号。電話03-3595-8583 第一東京弁護士会人権法制課
■東 京
▶初金の祈りの集い(聖体賛美式と黙想) 12月5日(金)午後7時～8時、麴町教会。司式＝アルン・デソーザ神父(イエズス会)。奉唱＝初金聖歌隊。電話03-3263-4584 麴町教会
▶ほしのいえ「遠い道を歩き続ける」12月17日(水)午後6時30分～9時、ムーブ町屋3Fホール(荒川区)。講演とミニライブ。出演＝徳田靖之(講演)、

中川五郎他(ミニライブ)。集会協力券2000円。詳細はほしのいえウェブサイト(<https://hosinoie.net/>)参照。電話・ファクス03-3805-6237 ほしのいえ(火木土 午後1時～4時)
■千 葉
▶土曜講座「フランシスコ教皇が遺したメッセージ」12月6日(土)午後2時～3時30分、カトリック船橋学習センター・ガリラヤ講座室。講師＝石田博士(朝日新聞記者)。ウェブサイト(下記QRコードからアクセス可)他から要申し込み。無料(寄付歓迎)。電話047-404-6775 ガリラヤ
■福 岡
▶ジャン＝フランソワ・シックス(倉田清訳)『シャルル・ド・フォーコー』(聖母の騎士社)読書会 12月6日(土)午後2時～4時、福岡黙想の家入口カトリック案内所(宗像くむなかつ)市)。無料。参加予定の方は要事前連絡。電話090-6420-1783 「キリスト教と文学」読書会グループ 戸上(とがみ)



番組

ラジオ心のともしび
(朗読・坪井木の実)
12月の放送日と執筆者 1日(月)松本准平(じゅんぺい)・2日(火)山本久美子・3日(水)三宮麻由子・4日(木)中井俊已・5日(金)こいずみゆり・6日(土)服部剛(ごう)・8日(月)熊本洋(よう)・9日(火)岡野絵里子・10日(水)湯川千恵子・11日(木)村田佳代子・12日(金)山本ふみり・13日(土)コリーン・ダルトン・15日(月)林尚志・16日(火)崔友本枝(ちえー・ともえ)・17日(水)片柳弘史・18日(木)許書寧(きよ・しゅにん)・19日(金)古川利雅・20日(土)谷口恵美(めぐみ)・22日(月)萩原久美

子・23日(火)森田直樹・24日(水)古橋昌尚・25日(木)堀妙子・26日(金)竹内修一(おさむ)・27日(土)植村高雄・29日(月)今井美沙子・30日(火)松浦信行(以上テーマ「神の愛を感じる」)・31日(水)奥本裕(「学生からもらった気づき」)。
ウェブサイト(下記QRコードでアクセス可)では24時間視聴可能。詳細は電話075-211-9341。
◇12月25日は特番編成のため放送休止になる局があります。25日分の振り替え放送は「心のともしび」ウェブサイトをご確認ください。



きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク) 12月

【教皇の意向：紛争地域のキリスト者】

戦争や紛争が起きている地域、特に中東で暮らすキリスト者が、平和、和解、希望の種となることができますように。

【日本の教会の意向：召命】

私たちそれぞれが何に召されているかをよく見極め、喜んで神と人に奉仕する生き方を選ぶことができますように。特に、司祭、修道者が、私たちの中から召し出されますように。

戦争や紛争が続く地域の中で、キリスト者は平和をもたらすための努力を続けてきています。軍事衝突が長く続くパレ

スチナのガザではさまざまなキリスト教関係団体が活動を続けています。カトリックのカリタス・エルサレムやプロテスタント団体による医療活動、避難や食料・生活支援活動に携わるカトリック救援サービス(CRS)、世界教会協議会(WCC)所属団体による人権保護活動など、困難な状況にある人々への支援が行われています。ウクライナやミャンマーでも内外のキリスト者が人道支援、平和をもたらすための活動を続けています。神の愛と平和をもたらすために受肉したキリストを信じるキリスト者が紛争地域における平和と和解、希望の種となるよう祈りましょう。

＊
経済発展を遂げた東アジア・オセアニアの国々、日本、韓国、台湾、オーストラリアなどでは司祭や修道者の召命が減少しています。そこには経済発展に伴う消費主義、少子化と核家族化、さらに個人主義の拡大が影響しています。人々は神との関わりが希薄となり、見える世界の中で幸せを求めています。けれども本当の幸せは見えないところに、キリストが示した神の愛の中に見いだせます。特に若い人々が、神と人への愛に結ばれた人生に目覚めることができるよう、さらに神と人々への奉仕に生きる司祭・修道者の召命に開かれるよう祈りましょう。

計 報

ドイル・ドナル神父（イエズス会）5月6日、老衰のため逝去。93歳。



1931年アイルランド・ダブリン生まれ。51年同会入会。65年司祭叙階。60年から62年まで栄光学園（神奈川）、68年から77年まで広島学院（広島）で英語を教え、72年から77年まで広島学院理事長を務めた。77年から81年まで同会神学院院長、77年から2002年まで上智大学で英語を教えた。01年から20年までSJハウス院長補佐を務めながら、02年から12年までは上智大学コミュニティ・カレッジでアイルランド文学を教えた。08年から16年までソフィア会（上智大学同窓会）副会長も務めた。24年6月からは、ロヨラハウスで療養していた（以上東京）。アイルランドと日本の友好関係に大きく貢献し、15年に海外でアイルランドのために貢献した人々に贈られるアイルランド大統領殊勲賞を受賞。優しさで静かなユーモアを持った社交的な人柄で、多くの人に慕われた。

栗本（あわもと）昭夫神父（イエズス会）7月17日、老衰のため逝去。98歳。



1927年広島県生まれ。51年同会入会。62年司祭叙階。64年から82年まで六甲学院中学校・高等学校で化学を教え、70年から75年まで学校内の修道院院長、75年から82年まで同校校長を務めた（以上兵庫）。82年から87年までは同会日本管区長として働き、88年から89年まで福岡の浄水通教会主任司祭を務めながら、泰星中学高等学校（現在の上智福岡中学高等学校）で化学を教えた。83年7月から86年3月ならびに89年4月から2001年3月まで泰星学園理事長、89年6月から90年5月ならびに97年6月から2001年3月までは六甲学院の理事長を務めた。89年から2010年まで麴町教会助任司祭。10年から15年まで同教会協力司祭。15年から紀尾井町修道院（SJハウス）で司牧活動をし、21年1月からはロヨラハウスで療養していた（以上東京）。教育者、司牧者として勤勉に熱心に働き、その薫陶によって多くの後進を育てた。

熊谷（くまがい）サツエ修道女（シヨファイユの幼きイエズス修道会）9月14日、熊本市内の介護医療院で肺炎のため逝去。94歳。1930年長崎県生まれ。51年同会入会。54年初誓願。初誓願宣立後、長年にわたり熊本、京都、長崎、福岡において保育士として子どもたちのために優しさと厳しさをもって根気強く献身した。その間61年から福岡サン・スルピス大神学院（福岡）で4年間奉仕した後、熊本信愛女学院（熊本）でも奉仕した。85年からは障害者支援施設・

薩来（さつき）園（鹿児島）の生活指導員として働き、96年からは同会の西合志（にしごうし）修道院（熊本）の院長を務めていたが、脊椎管狭窄（きょうさく）症で入院・治療した。その後、同会仁川本部（兵庫）において司祭館や研修館での奉仕の後、福岡や長崎の大浦修道院の院長として奉仕した。2021年にうっ血性心不全で入院して治療を受け、その後イエズスの聖心（みこころ）病院に入院し療養生活となった。23年3月からみこころ介護医療院（以上熊本）に入院し、酸素補給をしながらも小康状態を保っていたが9月14日、同会の創立記念日である十字架称賛の祝日に御父のみもとに召された。

糸永ナミ子修道女（純心聖母会）9月18日に逝去。88歳。1937年長崎県生まれ。同会初代会長・江角（えずみ）ヤス修道女と出会い、信仰深い家庭の雰囲気や周りの人々の祈りの支え、兄弟姉妹の召命の姿などに影響されて、修道女の道を歩みたいと同会への入会を決断した。66年初誓願。76年終生誓願。初誓願後、鹿児島川の川内（せんだい）純心女子高等学校で教職に就き、終生誓願後、鹿児島純心女子学園の寮監を務めた。その後、長崎原爆ホームの医療事務を任された。若い時から病気がちだったが、与えられた奉仕を懸命に果たしていた。98年からは、兄の糸永真一司教（鹿児島教区）の身の回りの世話などに努めた。やがて長崎のロザリオの聖母修道院で療養生活に入り、入退院を繰り返しながら、最後の1年間は寝たきりの生活となった。9月18日の午後、安らかな姿で御父のみもとに召された。



内藤恵介神父（大分教区）9月18日、肺炎のため逝去。62歳。1962年山口県生まれ。2005年司祭叙階。同年4月、宮崎教会協働司祭ならびに宮崎カトリック幼稚園園長補佐。07年大分教会協働司祭ならびにカトリック鶴崎幼稚園園長補佐。08年臼杵（うすき）・津久見主任ならびにカトリック臼杵幼稚園園長補佐。10年カトリック臼杵幼稚園園長。13年玖珠（くす）主任。15年から病気で療養していた。成人召命で叙階の恵みも40歳を超えてからだったが、それまで磨いた多彩な才能を宣教司牧に活かした。10年前から糖尿病を患い、透析治療と合併症の苦しみをささげて司祭生活を全うした。最期は神に全てを委ねた幼子のように天国へ凱旋（がいせん）した。



田北陽（たきた・よう）修道女（ノートルダム教育修道女会）9月23日、京都市内の病院で老衰のため逝去。89歳。1935年京都府生まれ。59年同会入会。61年初誓願。クライスト・ザ・キング・イン



ターナショナル・スクール、名護教会、うみのほし幼稚園、沖縄愛楽園（以上沖縄）、聖母の家（障害者施設／三重）、京都ノートルダム女子大学、ノートルダム女学院（以上京都）、みこころ学院、城北橋教会、南山大学女子寮（以上愛知）、東京修道院などで、教員をはじめさまざまな役割を通して奉仕をした。修道会の地区評議員を務め、翻訳にも携わった。信仰も教育への熱意も、家族からの遺産だった。明るく朗らかな性格で、どのような場に派遣されても人々や、特に青年から慕われた。

加藤はつ江修道女（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会）10月5日、北海道石狩市内の同会修道院で老衰のため逝去。98歳。1927年長野県生まれ。56年同会入会。59年初誓願。64年終生誓願。初誓願宣立後、帯広、苫小牧、函館、真駒内（まこまない）、小樽、倶知安（くっちゃん）、札幌、大麻（おおあさ）、花川（以上北海道）、山目（やまのめ／岩手）、青森のマリア院（同会修道院）などで与えられた使命を忠実に果たした。目立たず静かに共同体で生活し、幼稚園を運営している支部では修道院内の仕事の他に幼稚園も手伝った。真駒内のマリア院では、責任者の務めを6年間果たした。9年前からは花川マリア院で晩年を祈りの内に奉獻生活者として過ごしていた。真面目で責任感が強く、共同の祈りも個人の祈りも大切にする「祈りの人」で、プラハの幼子イエスに深い信心を持っていた。いつも感謝の気持ちであふれ、最期の言葉は「ありがとう」だった。

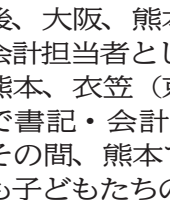


梅田富美子修道女（シヨファイユの幼きイエズス修道会）10月7日、兵庫県伊丹市内の介護老人保健施設で多臓器不全のため逝去。70歳。1955年京都府生まれ。78年同会入会。81年初誓願。初誓願宣立後、長崎、京都の養護施設で保育士として奉仕。鹿児島県・奄美大島での特別養護老人ホーム開設のため、1年間の研修を経た後、西仲勝（にしなかがち）修道院に派遣され、特別養護老人ホーム・めぐみの園で介護の必要な高齢者のために奉仕した（以上鹿児島）。その後、熊本の障害者支援施設・薩来（さつき）園で指導員として3年間働いた。2000年からは、兵庫の同会仁川本部で姉妹たちの介護を担当したが、02年から持病のため療養した。その後、内坪井（うちつばい）修道院に派遣され、イエズスの聖心（みこころ）病院でボランティアコーディネーター、ケアマネジャーとして働いた（以上熊本）。09年西仲勝修道院に派遣され、療養生活の傍ら、院内で小さな奉仕をささげた。12年からは仁川本部で療養しながら、得意の手芸でかわいい小物を作り、来訪者や姉妹たちを喜ばせていた。



福永満亀子（まきこ）修道女（シヨファイユの幼きイエズス修道会）10月17日、兵庫県宝塚市内の病院で老衰のため逝去。98歳。1927年徳島県生まれ。52年同会入会。55年初誓願。初誓願宣立後、大阪、熊本の信愛女学院の会計担当者として、また、長崎、熊本、衣笠（京都）の養護施設で書記・会計として奉仕した。その間、熊本では施設長としても子どもたちのために献身した。96年からは6年間、同会管区の会計を務めた。2006年から同会仁川本部で聖堂の花係を担当し、大好きな花を育て、四季折々の草花や木々を生かし、典礼に合わせて花を生けた。大祝日や誓願式などでは趣向を凝らしてダイナミックに花を生け、見る者の心を豊かにした。24年からは慢性心不全で入院し、療養していたが10月17日、安らかに御父のみもとに召された。

森岡千恵子修道女（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会）10月18日、北海道月形町内の高齢者施設で膵臓（すいぞう）がんのため逝去。93歳。1932年北海道生まれ。55年同会入会。58年初誓願。63年終生誓願。初誓願宣立後、従順のうちに「教育者」の使命を受け入れ、北海道で女子教育のために全力を尽くした。藤女子中学・高等学校で14年間、旭川藤女子中学・高等学校で7年間、家庭科の教師として忠実に働いた。旭川藤女子中学・高等学校で11年間、藤女子中学・高等学校では2度にわたり9年間学校長を務めた。定年退職後は札幌の寄宿舎で3年間、舎監と寄宿舎マリア院の責任者として務め、2008年からは旭川および札幌マリア院の修道院内で奉仕。21年12月に月形藤の園（高齢者施設）に入居し、晩年を過ごしていた（以上北海道）。生徒、卒業生や職員らとは笑顔で接し、共同体の中では目立たず控えめに、喜びをもって働いた。旭川マリア院でオルガンを弾くことが楽しみだった。よく祈り、静けさのうちに全ての意向、特に同会が設立した学園のことを神に任せ、感謝の心を最期まで持ち続けていた。



田中静子修道女（ノートルダム教育修道女会）10月24日、京都市内の特別養護老人ホームで老衰のため逝去。90歳。1935年京都府生まれ。61年同会入会。65年初誓願。ノートルダム女学院中学高等学校で長年、宗教科教員として奉職した。退職後は京都ノートルダム女子大学の手話サークル講師を務め、ノートルダム学院小学校、洛星中学校、京都教区信仰教育委員会、京都教区共同宣教司牧推進チームでも奉仕した（以上京都）。与えられたどのような事柄にも誠実に、ひたむきに取り組む姿勢を持っていた。大変多くの児童、生徒、学生にキリストの愛を伝え続けた生涯だった。



田中静子修道女（ノートルダム教育修道女会）10月24日、京都市内の特別養護老人ホームで老衰のため逝去。90歳。1935年京都府生まれ。61年同会入会。65年初誓願。ノートルダム女学院中学高等学校で長年、宗教科教員として奉職した。退職後は京都ノートルダム女子大学の手話サークル講師を務め、ノートルダム学院小学校、洛星中学校、京都教区信仰教育委員会、京都教区共同宣教司牧推進チームでも奉仕した（以上京都）。与えられたどのような事柄にも誠実に、ひたむきに取り組む姿勢を持っていた。大変多くの児童、生徒、学生にキリストの愛を伝え続けた生涯だった。



田中静子修道女（ノートルダム教育修道女会）10月24日、京都市内の特別養護老人ホームで老衰のため逝去。90歳。1935年京都府生まれ。61年同会入会。65年初誓願。ノートルダム女学院中学高等学校で長年、宗教科教員として奉職した。退職後は京都ノートルダム女子大学の手話サークル講師を務め、ノートルダム学院小学校、洛星中学校、京都教区信仰教育委員会、京都教区共同宣教司牧推進チームでも奉仕した（以上京都）。与えられたどのような事柄にも誠実に、ひたむきに取り組む姿勢を持っていた。大変多くの児童、生徒、学生にキリストの愛を伝え続けた生涯だった。

世界が最も暗い時 光の主 イエスが生まれた

絵画で味わうクリスマス アンドレア・レンボ補佐司教に聞く



11月30日から待降節が始まる。クリスマスに向かうこの時を迎え、キリストの誕生を祝う場面を描いた絵画『東方三博士の礼拝』(ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノ作/今号の表紙に掲載)についてアンドレア・レンボ補佐司教(東京教区)に解説してもらう。レンボ司教は真生会館(東京)やカトリック船橋学習センター・ガリラヤ(千葉)の講座でキリスト教美術の魅力を伝えている。



星に導かれた博士たち

クリスマスに向けて、イエス様の誕生を知ってお祝いに駆け付けた3人の博士のことを取り上げたいと思います。ファブリアーノの『東方三博士の礼拝』は1423年の作品で、板にテンペラ絵の具で描かれています。幅3メートル、高さ2メートル82センチの大きな作品です。

イタリア・フィレンツェのパツラ・ストロツツィの依頼で制作され、サンタ・トリニタ教会の家族礼拝堂に掲げられました。(本紙の表紙に掲載した部分は)現在はフィレンツェのウフィツィ美術館に収蔵されています。

まず、ルネッタ(作品上部の三つのアーチ部分)に注目してみましょう。

ルネッタの尖塔中央の円の中は左から大天使ガブリエル、真ん中はイエス様、右はマリア様です。イエス様はこの世を祝福しています。その円の下の左右には預言者たちが描かれます。

ルネッタのアーチ部分の左は東方にいる3人の博士が夜空を見上げ、イエス様の誕生を知らせる流れ星を観察している場面です。続けて博士たちはユダヤ人の王として生まれたイエス様を拝むため、大勢のしもべを連れてエルサレムに向かい(中央)、都に入城します(右)。博士たちの旅が、段階的に示されているのです。

世の光として誕生したイエス

ルネッタの下には、3人の博士がイエス様に黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげるシーンがメインに描かれています。

博士たちについて説明する前に、聖家族を見ていきたいと思います。左下の青と赤の衣を身にまとっているのがマリア様、その膝の上にいらっしゃるのがイエス様、マリア様の後ろに立ち、黄金の衣を身に着けているのがヨセフ様です。

金色の外套は、聖ヨセフが神様に祝福さ

れていること、イエス様が世の光として現れたことを意味しています。ヨセフ様の頭の上に、黄金の光が輝いていますね。神様はまず初めに聖ヨセフを照らしたのです。

マリア様の衣の赤は血の色です。マリア様の「人性」を表し、その子イエス様にも人性があることを象徴します。青は神様の存在を示す色ですから、マリア様は人間でありながら神様の恵みに包まれた、神聖な存在であることを表現しています。

マリア様の後ろの女性二人のうち、一人は質素な服装、手前にいるもう一人は豪華な服装をしています。イエス様の誕生で貧しい人も、豊かな人も喜んでいることを示しています。

その後ろには質素な建物がありますね。貧しさの中で生まれたイエス様が「民の神」であることを、3人の博士が証明していることをこれからお話しします。

年を取るほど神を畏れる者になる

イエス様は、聖家族にひざまずく年老いた博士の額に手を置いて祝福しています。聖ヨセフの頭の上の星からひざまずいている博士までが流れるように描かれ、イエス様の誕生を通して、神様が人間を祝福していることを表現しています。

年老いた博士の後ろでかがんでいるのは中年の博士、立っている博士は青年です。

3人の博士は年齢が異なります。年老いた博士はイエス様が神様だと悟っているのでひざまずき、冠を脱いで祝福を受けています。中年の博士は、冠を外そうと手をかけてはいるものの、まだ迷いがあります。青年の博士は馬から降りたばかりで、足元のしもべが左足から馬具を外しています。青年の博士は、冠を外そうとしていません。

この3人の博士たちの姿は、人間の人生の歩みの中での、神様と人間のつながりを表しているのです。年を取るほど神様を畏れるようになることを表しています。

博士たちをもっとよく見ていきましょう。

老人の博士は没薬、中年の博士は乳香、青年の博士は黄金をイエス様に贈ります。昔のヨーロッパでは、没薬は塗り薬としてけがの治療に使われました。乳香はアジア由来。黄金はアフリカに採掘場がありました。

ですから老人の博士はヨーロッパ、中年の博士はアジアを、青年の博士はアフリカを象徴しています。そして贈り物にも意味があります。黄金は目に見える美しさを表し、乳香は典礼で使われることからイエス様が礼拝されるべき方であることを示し、没薬はイエス様が人間の救いのために苦しみ直面することを暗示しています。

聖家族の服装と3人の博士の服装には差がありますね。聖家族はシンプルだけれど美しい。博士たちは立派なアラベスク模様です。細かいところまで描くのは、ファブリアーノの特徴です。イエス様は立派な服を着た博士を祝福していますので、地上の金と銀は決して悪いものではなく、それを神様にささげるなら、お金持ちも貧しい人もイエス様に近づくことができることを意味します。

青年の博士の斜め後ろでワシを持っているのが、作品を依頼したストロツツィです。ワシは権力の象徴です。隣の若者はストロツツィの息子で、(鑑賞している)私たちの方を向いています。私たちを「この場面に入ってください」と招いているのです。

12月25日は元々、ローマ帝国の祭日で当時の冬至に当たり、光の神様を祝う日でした。この日を境に昼が長くなりますね。この世が最も暗い24日の夜中に、この世を照らすイエス様が誕生したのです。イエス様の誕生を描く時、画家たちはなぜたくさんの金色を使うのか。金は光の象徴だからです。

この作品全体がイエス様の誕生の全てを物語っています。それではストロツツィの息子の招きに応じて、私たちも群衆に加わり、イエス様を拝みに行きましょう。



記事全文